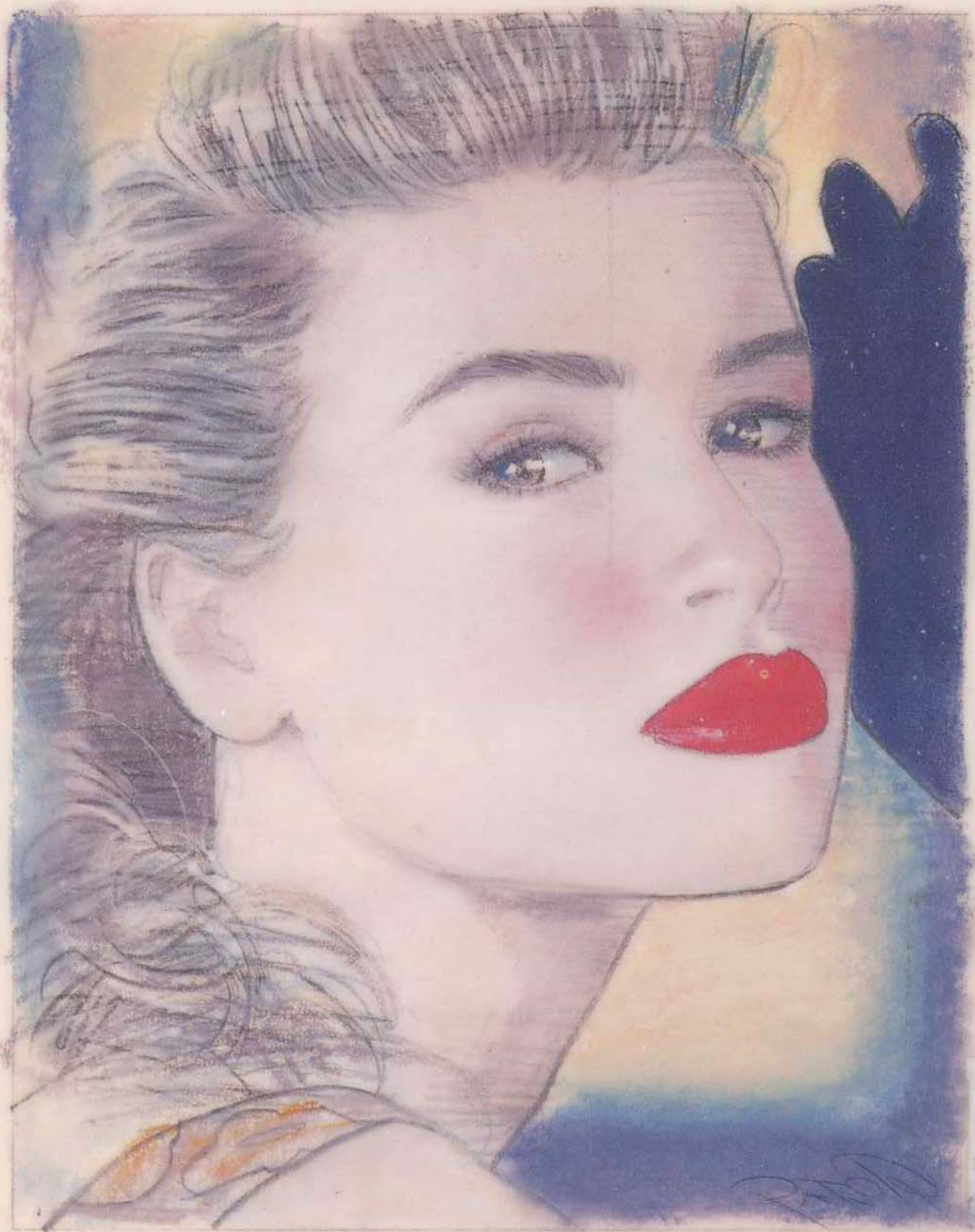


ビリーがいた夏

One Summer Dream

喜多嶋 隆

Takashi Kitajima



角川文庫

ビリーがいた^{なつ}夏

き た じ ま た か し
喜多嶋 隆



角川文庫 8858

平成五年一月二十五日 初版発行

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二—十三—三

電話 編集部(〇三)三八一七一八四五二

営業部(〇三)三八一七一八五二

〒一〇二 振替東京③一九五二〇八

印刷所——新興印刷 製本所——千曲堂

装幀者——杉浦康平

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。

落丁・乱丁本はご面倒でも小社角川ブック・サービス宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

©Printed in Japan

ビリーがいた夏

喜多嶋隆



角川文庫 8858

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

目次

1	泥棒ビーチ	五
2	3ドル25セントで救われて	一九
3	うちが(朝一食堂)だった頃	三五
4	気分はスロー・バラード	五三
5	勝手に泳げ	六六
6	セミが鳴いていたあの日	七八
7	告白はエア・メールで	一〇三
8	たそがれの黒い瞳	一三三

9	クジラは、ビートルズが好きかもしれない	一三五
10	灯台は遠いけれど	一五三
11	海のビリー・ザ・キッド	一七三
12	18歳未満お断わり	一八九
13	ファースト・キスは霧の中	二〇六
14	密 漁	二三三
15	夢追い人に、バラードを	二四〇
16	サヨナラの虹	二五六
	エピソード	二六七
	あとがき	二七六

1 泥棒ビーチ



あたしは、生まれてはじめて盗みをはたらこうとしていた。

砂浜にたたずんでいる、その外人の後ろに、そっと近づきはじめた……。

湘南。

葉山・一色^{いっしき}海岸。

いまは、5月の前半。

ゴールデン・ウィークが終わったところだ。

海水浴シーズンは、まだ先だ。砂浜では、海の家^{うみのか}の建築もはじまっていな^いい。そのせいで、一色の砂浜は、ガラ^ンと広く見える。

俳優のいない舞台みたいにガランとした砂浜。午後の陽射しが斜めにさしていた。遠浅の海に、磯がポツリポツリと顔を出している。その磯の近くに、小船が浮かんでいた。

それは、地元の漁師の船だ。年寄りの漁師が、船べりから水中メガネで水の中をのぞきこんでいた。

漁師は、サザエを獲っているのだ。

サザエを見つけると、先が三叉になった長いモリでサザエを突いて海から上げる。

このあたりでは「見突き」と呼ばれている漁のやり方だった。

漁師は、海の中をのぞきこむのに熱中している。砂浜での出来事になんて、まるで気づかないだろう。

あたしは、また一歩、その外人の後ろに近づいていった……。



この日、あたしが一色海岸にきたのは、ほんの偶然だった。

学校から家に帰り、セーラー服を脱ぎ捨てた。カバンを放り出した。

煙草が吸いたかった。けど、家で煙草を吸うと母親がうるさいんで、外に出ることにした。

細身のジーンズをはいた。熱帯魚の柄のプリント・シャツを着た。綿のスタジアム・ジャンパーをはおった。スタジアム・ジャンパーのポケットに、SセAーLラEムMとライターを入れた。

コンヴァースのバスケット・シューズをはく。家を出た。

家から一番近くにある一色海岸に向かった。松林の間の細い道を砂浜に向かっていく。両側を塀へいにはさまれた石段を10メートルぐらいおけると、目の前に海が広がった。

いまは、午後4時。

かなり傾いた陽射しが、海に光っていた。

サラリとした初夏の風が、あたしのポニー・テールを揺らして過ぎた。

ガランとした砂浜。小さな波が、リズムカルに打ち寄せていた。波打ちぎわを、黒い犬が1匹、うろうろと歩いていた。それは、近くの釣り船宿〈長五郎丸〉の飼いだ犬だった。

あたしも、ゆっくりと砂浜を歩きはじめた。

歩きながら、セーラムを1本くわえた。ちよつと立ち止まる。ライターの火を両手でおおって、煙草に火をつけた。

また、歩きはじめた。

そのときだった。

砂浜にいる外人に気づいたのだ。

男だった。斜め後ろからなので正確にはわからないけど、わりと若い。金髪を短かめに刈っている。

長袖ながそでのボタンダウン・シャツ。その袖を、ヒジのところまでまくり上げていた。ジーンズをはいていた。

がっちりした体格をしていた。雰囲気からして、兵隊のようだった。

この葉山あたりには、アメリカ兵が多い。近くの横須賀基地よこすかベースに勤務しているアメリカ兵が、よく、このあたりに家やマンションを借りて住んでいるのだ。

砂浜には、材木や鉄骨が積み重ねてあった。

もうしばらくすると、この砂浜で、海の家うみのかの建築がはじまる。その材木は、海の家をつくるためのものらしかった。

積んである材木に、外人は腰かけていた。ぼんやりと海をながめていた。

あたしの視線は、外人のわきに置かれているものに止まっていた……。

それは、どうやら、楽器ケースらしい。

トランペット？ いや、ちがう。もう少し大きい。サキソフォンか、トロンボーンだろう。もう3年ぐらい前、あたしが大人たちの言うへまともな女の子だった頃、中学校のブラスバンドに入っていた。アルト・サクスを吹いていた。

だから、楽器ケースの大きさや形で、だいたい、中の楽器が予想できた。サクスにしても、トロンボーンにしても、どっちでもいい。とにかく、売り飛ばしてお金になればいいのだ。

あたしは、煙草をくわえたまま、外人をながめた。

そっと後ろから近づいて、あの楽器ケースを持ち去ることは可能だろうか……。さいわい、下は砂浜だ。足音はしないだろう。

なんとかなる。あたしの胸の中で「GO!」のサインが出た。

あたしは、くわえたまま短くなった煙草を、指で足もとに捨てた。バスケット・シューズで、踏み消した。

外人の方に、そっと近づいていこうとした。

そのとき、砂浜をゆっくりとジョギングしてくる人影が見えた。あたしは、足を止めた。走ってくるのは、外人の女だった。

あたしも、顔だけは知っている。この近所に住んでいる白人のおばさんだった。

確か、彫刻家だということだった。

湘南には、アメリカ兵も多いけれど、外人の芸術家もけっこう住んでいる。

その白人のおばさんは、あきらかにダイエットのためにジョギングしていた。あたしが見た感じでも、10キロは贅肉ぜいにくがついている。

おばさんは、やたら派手なウェアに身を包んでいた。

青いジョギング・パンツ。ピンクのTシャツ。金髪に白いヘア・バンドをしている。

そんな派手なかつこうなのに、ドタリドタリとした重そうな足どりでジョギングしてくる。

あたしは、公衆トイレのかげにかくれた。

おばさんは、海をながめている外人男の前を、走り過ぎる。たぶん知り合いじゃないんだろう。ちらっと顔を見ただけだった。

おばさんのぴっちりしたTシャツの下で、お腹の贅肉が、たぶんたぶんと揺れていた。

その太いお腹を見ていたあたしは、ふと、親友の智子ともこのことを思っていた……。



智子が、妊娠していることに気づいたのは、2週間ぐらい前だった。

相手は大学生だという。今年の1月あたりからつき合いはじめた相手らしかった。あたしは直接に会ったことはないけれど、話にはきいていた。

妊娠に気づいた智子は、当然、相手の大学生に、そのことを言った。

相手は、鼻で笑って、

「誰の子供だか」

と言ったという。まるで、絵にかいたような展開だ。

そりゃ、智子は、まじめな女子高生とはいえないだろう。

あたしと同じで、学校もさぼる。煙草も吸う。ときには、ケンカもする。

けど、男女関係には、いちずだ。同時に何人もの男とつき合うような娘じゃない。

早い話、相手の大学生は、責任のがれをしようとしている最低野郎らしい。

さすがに、智子も、子供を墮す^{おろ}決心をした。

けど、墮すにはお金が必要だ。相手の大学生にそれを言っても、のらりくらりと逃げばかりいるという。

智子は、自分で少しのお金をつくった。といっても、手術にかかる費用には、かなり足りない。

その話をきいたあたしも、なんとかしようと思った。少しでもお金をつごうできればと思った。

けど、ダメだった。

バイトにいけば、すぐに雇い主の大人とケンカをしてしまう。(たいていの場合、むこうが悪いのだけれど)

おまけに、うちの母親は、徹底的にあたしに冷たい。小づかいなんて、ほとんどくれない。

とても、何万円というお金なんて、つくれそうにもない。

胸の奥が痛かった。何もできない自分がもどかかった。

そんな時だ。砂浜に楽器ケースを置いて海をながめている、この外人男を見つけたのだ。



ジョギングのおばさんは、ゆっくりと遠ざかっていった。葉山御用邸の前を通り過ぎ、姿が見えなくなった。

すぐ近くの磯でサザエの見突きをしていた漁師も、小船をこいでどこかへ行ってしまった。

た。

いまだ。

砂浜に居るのは、外人男とあたしだけだ。いまがチャンスだ。

あたしは、公衆トイレのかげから出ていった。そっと足音をしのばせて、外人男の後ろに近づいていく……。

あと30メートル……。20メートル……。男の斜め後ろから近づいていく……。

見れば、男は、缶コーヒーか何かを持っていた。それを飲みながら、ぼんやりと海をながめていたらしい。

あたしは、さらに近づいていく。

あと10メートル……。

体がかめる。かがめたスタイルで、そっと男の後ろに近づいていく。

あと7メートル……。5メートル……。もう、男が持っている缶コーヒーのラベルまで読める。

3メートル……。2メートル……。1メートル……。

あたしは、左ヒザを砂浜についた。右手をそっと楽器ケースにのばす。

だいじょうぶだ。男はまだ、気づいていない。

楽器ケースの把手を、つかんだ。ゆっくりと、こっちに引き寄せてくる……。

OK。

あたしは、楽器ケースを、自分の足もとまで引き寄せた。それを持ち上げた。立ち上がる。そっと回れ右。ずらかろうとした。

そのとき。

足もとで何か小さな音がした。

砂浜に落ちていたビニールのコップが何かを、踏みつぶしてしまったらしい。

外人男が、気づいた！ ふり向いた！

あたしはもう、楽器ケースをつかんで駆けだしていた！

外人男が何か叫んだ。追いかけてくる！

あたしは、全速で走った！

けど、楽器ケースを持ってるんで、スピードが出ない。

20メートルぐらい行ったところで追いつかれた！

外人男が、あたしの片腕をつかんだ。

「待て！」

驚いたことに、やつは日本語で叫んだ。

「待て」と言われて待つバカはいない。あたしは、ふり向く。外人男のスネを、バスケット・シューズで蹴^けった。

「ウッ！」

相手が声を上げた。あたしの腕をつかんでいた相手の手がはなれた。

あたしは、また走りだした。

相手も追いかけてくる。

あたしは楽器ケースを持ってるんで、やっぱり、スピードが出ない。

また20メートルぐらいいったところで追いつかれてしまった。

外人男の両手が、あたしの肩をつかんだ。

あたしは、とっさにヒジ鉄をくらわせた。

まぐれ当たりで、相手の腹に入った！

やつは、何か、うめき声を上げた。お腹^{なか}をおさえた。

あたしは、また、走りだした。

けど、ちょっと息が切れはじめていた。

なんせ、足もととは走りづらい砂浜だ。おまけに荷物を持っている。走るのは、かなりしんどいのだ。